

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-51C	21-041	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
題名 (原題/訳) Lifetime alcohol intake, drinking patterns over time and risk of stomach cancer: A pooled analysis of data from two prospective cohort studies 生涯の飲酒量、飲酒パターンと胃がんリスク：2つの前向きコホート研究のプール解析		
執筆者 Jayasekara H, MacInnis RJ, Lujan-Barroso L, Mayen-Chacon AL, Cross AJ, Wallner B, Palli D, Ricceri F, Pala V, Panico S, Tumino R, Kühn T, Kaaks R, Tsilidis K, et.al.		
掲載誌 Int J Cancer.2021 Jun 1;148(11):2759-2773. doi: 10.1002/ijc.33504.		
キーワード	PMID	
胃がん、噴門部胃がん、非噴門部胃がん、生涯の飲酒	33554339	
要 旨 目的： 飲酒はいくつかのがんの原因であるが、胃がんに対しては十分な証拠はない。本研究では、長期の飲酒と胃がんリスクおよびそのサブタイプの間接関係を検討することを目的とした。 方法： がんと栄養に関するヨーロッパ前向き研究（EPIC）およびメルボルン共同コホート研究（MCCS）の491,714名をベースラインデータとしてプール解析を行った。ヘリコバクター・ピロリ感染を含む潜在的な交絡因子で調整し、生涯の飲酒量に関して胃がん新規発症のハザード比と95%信頼区間を推定し、さらに飲酒習慣の変化のパターンについてトラジェクトリー解析を行った。 結果： 胃がん発症は7,094,637人年中に1225名（非噴門部78%）、生涯の飲酒データがある対象（5,455,507人年）では382,957名中に984名であった。生涯の飲酒は胃がん全体のリスクと関連しなかったが、非噴門部胃がんとは弱い正の関連（ハザード比1.03、95%信頼区間1.00-1.06、10g/日増加毎）、0.1-4.9g/日と比べて ≥ 60 g/日ではハザード比1.50（95%信頼区間1.08-2.09）が認められた。噴門部胃がんでは弱い負の関連（ハザード比0.93、95%信頼区間0.87-1.00）が認められた。トラジェクトリー解析では、飲酒の少量摂取を継続した群と比べ、大量摂取後に低下した群では、非噴門部胃がんのハザード比1.48（95%信頼区間1.10-1.99）、噴門部胃がんのハザード比0.51（95%信頼区間0.26-1.03）であった。これらは喫煙やヘリコバクター・ピロリ感染による明らかな違いは無かった。 結論： 特に成人初期に飲酒の多量摂取を控えることは、非噴門部胃がんの予防に有効と思われる。噴門部と非噴門部胃がんが異なる結果であったことは病因の違いを示唆している。		